

中部の

エネルギーを 築いた

人々

松永安左エ門を補佐し、
事業を守った 海東要造

東邦電力を率いた松永安左エ門に、「松永四天王」と呼ばれる俊秀がいた。進藤甲兵、内藤熊喜、宮川竹馬、海東要造の4人である。なかでも海東は、松永安左エ門の事業を守り、補佐に徹し、松永の事業を継ぐ経営者として目された人物である。

海東は明治20年5月、栃木県行方郡秋津村の名家、海東市右衛門の3男として生を受けた。水戸中学から慶應義塾普通部・予科を経て、明治45年に同法律科を卒業した。学生時代はスポーツで鳴らし、ラグビー、ボート、フットボール、水泳(水府流)、柔道(3段)に



海東要造

打ち込んだ。同級生には、福沢桃介の長子福沢駒吉がいた。

九州電灯鉄道・東邦電力

慶應義塾卒業に際し、海東は友人駒吉の父福沢桃介の紹介で、松永安左エ門が活躍していた九州電灯鉄道に入社した。海東は松永の信頼を得て、下関支店長心得、前田火力の建設所長を勤め、松永の中国視察に同行した。大正10年12月26日、九州電灯鉄道と関西電気との合併(合併後東邦電力に改称)の合意なるや、翌年1月14日、大阪での臨時株主総会に向け不眠不休の勤務を続けた。東邦電力では

— 松永翁の補佐役に徹して —

取締役役に就任、累進して副社長となった。昭和初年、東邦電力が東京電力を創設して東京進出をしたときは留守師団長として本社を預り、昭和8～11年には、九州鉄道事件、山口事件に巻き込まれて苦難に耐えながら会社を守った。また名古屋市との間で報償契約に基づく買収問題が起きたときも専務取締役とし



松永安左エ門



福沢駒吉



九州電灯鉄道本社

てその衝にあたった。松永は、海東への追悼文で「私どもの悪戦苦闘したかげには常に海東君がおりました」と述べ、海東への深い「恩義」を語っている。海東は、合同電気副社長

(昭和5年7月)、中部合同電気社長(昭和12年9月)、揖斐川電力取締役(昭和13年12月)などにも就いている。

中部配電社長 — 戦時下の電力確保 —

配電統制令が発せられ(昭和16年8月)、中部配電の設立命令(同年9月)が下ると、海東は設立委員長として、利害錯綜する各社の統合に手腕を発揮し、9配電会社中もっとも統一がとれていると評された。強大な権力を有する官庁に対しても迎合することなく、大胆率直に意見を述べ、かえって信頼を高めたという。昭和17年4月、新発足した中部配電の社長に就任し、強い責任感と使命感を持って、重要産業への電力確保、重複設備の統合合理化、ビルマ電気事業の復興など、戦時下の難局処理にあたった。しかし発足3年余で敗戦を迎え、昭和21年11月に辞任、その後、戦後電力再編成で中部電力が設立されると初代会長職に就いたが、病気のため1年で相談役に

退いている。



中部配電本店

東亜合成化学工業会長 — 戦後再建に邁進 —

昭和19年7月、戦時下の企業統合で、福沢系の矢作工業・昭和曹達と三井グループの北海曹達・レーヨン曹達を合併し、東亜合成化学工業が発足した。社長に就任した福沢駒吉の懇請で、海東は取締役役に就任した。配電会社の社長は兼務を禁じられていたが、社長福沢駒吉から軍需大臣に特に申請して認められている。昭和20年3月に社長福沢駒吉が逝去

し、海東は公職追放が解除された後、昭和23年10月、取締役会長に就任、「福沢駒吉のためにこの会社を何とか軌道に乗せておきたい」と再建に邁進し、戦後の財閥解体の動きの中で東亜合成化学の分割を防ぎ、東洋レーヨンとの間にナイロン原料(ラクタム)の長期契約を結んで再建の道筋をつけた。昭和27年12月に起きた名古屋工業所の爆発事故では、



東亜合成化学工業 名古屋工場(昭和20年代)

病軀を押して事故処理や対応策の策定にあたり、この無理もあって、28年9月惜しまれながら世を去った。享年67歳であった。

(浅野 伸一)